

JELA NEWS

JELAニュース 第2号 2003年12月1日発行 発行責任者 ローウェル・グリテベック

日本福音ルーテル社団 〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1 Tel.03-3260-8637 Fax.03-3267-4636 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援 ・ アジア子ども支援 ・ フラジル子ども支援 ・ 海外ボランティア派遣 ・ 奨学金制度 ・ 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



Akash Prakash Shinde(33)

Baarki Tukaram Bharti(24)

Chandni Abhimaan Pawar(42)

Monali Ashok Unhale(51)

Mayuuri Babasaheb(Dattatraya) Garadkar(54)

Dinesh Dattatraya Chakre(53)

Sagar Abhimaan Pawar(43)

Sagar Dutta Pawar(25)

Savita Vasant Navgire(55)



Bhagu Saheb Shinde(03)

「神様の子どもたち」支援金により元気にくらま子どもたち

子どもたちの近況を伝える写真がインドから送られてきました。一日2回の食事とお風呂を与えられ、余暇と教育の両面にわたるサービスを受けて、みんな元気に毎日を過ごしています。
(名前の後の数字は、皆さまにお配りした写真についている識別番号です)

この号にはこんな記事が

グループ・ワークキャンプ2003参加者レポート	2～5
グループ・ワークキャンプ2004参加者募集要項	5
グループ・ワークキャンプ引率者募集!	5
ワークキャンプ・プログラムの拡大	5
音楽による看取りのケア (キャロル・サック)	6
奨学金受給者・シホンピン牧師から	7
「神様の子どもたち」アロレ博士から	7
インドの病院に乳児保育器を寄贈	7
海外ボランティア派遣事業の紹介	8
献金者一覧	8
J.E.L.A.自社ビル建築中	8
編集後記	8

グループ・ワークキャンプ2003 Diving Deep into Service



毎年夏に米国全域と一部周辺地域で開かれる超教派の催し「グループ・ワークキャンプ」に日本から16名の青少年を派遣しました。一行は4名の引率者とともにオハイオ州でホームステイを満喫した後、同州ゼインズビルのキャンプに参加し、2週間の滞在を終えて8月12日に全員無事帰国しました。皆さまのお祈りを感謝します。以下は参加者全員のレポートからの抜粋です。年齢はキャンプ参加時のものです。

1万5千人の胸に響いた話

●「水曜日の夜のプログラムで、私は茉莉とグレンが去年のキャンプで出会った話を皆に同時通訳しました。戦争で2人の叔父を失ったグレンはそれ以来日本人を憎んでいましたが、茉莉の惜しみない奉仕活動を見て、やっとクリスチャンとして人を許し、そして自分も許しを求めるようになりました。茉莉とグレンの話は以前から何回も聞いていました。今回のキャンプでこの話をするのも前もって分かっていた。それでも途中で目がかすみ、のどがつまりました。本人たちがこのキャンプで再会できたこともす



夜の集会で歌う日本からの参加者 円内写真は左より 近藤茉莉さん、司会者、グレン氏

ばらしい偶然でした。2週間前に行なわれていた別のキャンプにたまたまグレンが通う教会のメンバーが参加していました。この話を聞いていたそのメンバーは、会場に大写真になったグレンの写真を見た時にビックリしてスタッフに問い合わせました。茉莉がゼインズビルに来ることを聞いた彼はその旨をグレンに伝えました。グレンは忙しい仕事の合間をぬってわざわざニューヨークからこの日のために茉莉に会いにきました。茉莉とグレンの話は、グループが今年主催した全米とプエルトリコ等を含む65ヶ所以上のワークキャンプで紹介されました。少なくとも1万5千人以上の若者達がこの素晴らしい話を聞いたこととなります。例えば少し変わっているかもしれませんが、イエスさまがパン5個と魚2匹で5千人の群衆の飢えを満たした奇蹟のように、子どもたちも神さまへの奉仕、人への奉仕を通じて何倍も人の心を満たすことができたことを実感しました。」

(星崎ポール・JEL A職員)

●「主にある交わりだったからこそ彼(=グレン)は日本人のことを赦すことができたのだと思います。そして彼は私にそのことを伝えてくれました。ロウソクの火を分かち合うように喜びを分かち合うこと、そのことによって喜びはどんどん伝染していきます。彼はその一番始めとなってくれました。彼は自分が日本人を赦したことを、心の中にしまっておくこともできました。しかし彼が伝えてくれたことによって、私は主イエスの愛を彼の中に感じるようになりました。彼が私に伝えてくれたその喜びは、私を幸せにしてくれただけではなく、どんどん、どんどん伝えられてたくさんの人に喜びが伝えられました。そんな彼に感謝し、学びたいと思います。」

(近藤茉莉・20歳 日本基督教団聖ヶ丘教会)

奉仕の喜び/やりがいと達成感のあるワーク

●「今回、キャンプ中、奉仕する喜びを知りました。神様に対する半端だった気持ちに気付きました。かけがえのない家族への忘れていた気持ちを思い出しました。毎日毎日のデポジション、プログラムで神様の愛を感じる事ができました。神様が本当にいるんだ、と、初めて思うことができました。同年代の友達が自信をもってキリスト教、と言えることが、自分にもできる自信ができました。」

(長島英子・15歳 ルーテル仙台教会)

●「ワークキャンプは6人1グループで1つの家を修繕します。僕のグループは、裏口からでるための階段とポーチを作り直しました。最初は、もとある階段を壊すところから始めたので、一週間では終わらないだろうと思っていました。でも、グループの仲間がいつも気を使ってくれて作業がとてもしやすかったです。作業中は安全第一で危ないと思ったらやらなくても良いのでとても楽に出来ました。心配していた作業も木曜日の午前中に終わり、達成感を感じ、参加してよかったと思いました。このワークキャンプはとてもしやすくて、僕はこれからも奉仕について考えていきたいと思っています。I can never forget this trip.」

(横田裕哉・14歳 ルーテル蒲田教会)

●「今回は、“奉仕”をするということ深く考えさせられました。私たちは、人に何か求められたとき、ためらいなどがあって、素直に奉仕することができないかも知れません。けど、自分が何を思うかということよりも、まずその人のために私に何ができるかということに1番に考えることができるように祈っていきたいです。」

(永吉文音・16歳 ルーテル天王寺教会)

●「ワークサイトでは日本人は一人しかいないけどいつもイエス様がそばにいてくれる事が感じられてすごくうれしかったです。それにみんなと協力して、1つの事ができてよかったです。初め家を見たとき、大変そうだなあ、私たちに期間内に本当に直せるのだろうか、と不安でした。でもみんなと一生懸命やっていくうちに、最初は暗そうだったレジデントのおばあさんも明るくなって、いっぱい話し掛けてくれるようになりました。そうなるにつれて、奉仕する事って素晴らしいなあと感じました。家を修理し終わった最後の日、家を見てレジデントの人が涙をこらえてすごく喜んでくれて感動しました。それにみんなとやっていう達成感がありました。」

(藤岡沙弥・15歳 ルーテル広島教会)

●「仕事場では孤独な日々が続いた。しかしそう思った直後、手紙を交換するという企画が始まった。同じクルーから来ていた、読んでみた。『あなたはよくがんばっている、一緒にいると楽しいよ』という内容の手紙だった。メツチャクチャうれしかった。がんばろうって思った。」

(大柴翔・13歳 ルーテル武蔵野教会)

心が変わられる出会いの場

●「ワークキャンプの説明会の時、去年のキャンプで参加者の中に神様の愛を感じて感動した人がいたという話を聞いたとき『自分はそんな感動はしいひんやろうなあ…』と思いました。それに、うちの家では私があんまり覚えてない時からキリスト教だったし、『神様に会いに』とか、そういう風に思って日曜日に教会に行っていた訳じゃないし、ただ自分がキリスト教だから、という理由でしか行ってませんでした。茉莉ちゃんとグレンさんのエピソードが紹介された次の日の夜のプログラムで十字架の下でお祈りをしました。言葉での説明はうまくできないけど、あとからあとからこみ上げてくるものがありました。自分は神様の愛なんて感じないだろうと思っていたのになんでかわからないけど涙がとまらなくなりました。その時、佐藤先生が『イエス様は七瀬ちゃんのために十字架にかけられました』と後ろから言ってくれました。本当にそうなんだなあと思いました。イエス様はこんなに小さな私の為に、私たちの為に十字架にかけられた、すごく神様の愛を感じることができました。そして神様のあとをついて行きたいと思いました。日本に戻ってこの経験を人に話すことも一つの奉仕活動だと思えます。毎日忙しいけど一日に一回でも神様と話す時間を持たたいです。教会に行く理由も神様に会いに行く、そういう気持ちになりました。」

(山下七瀬・13歳 ルーテル京都教会)

●「このキャンプを通じて、私は何が起ころうとすべては導きの中にあるということを理解し、信じて進む自信ができました。言葉の壁は最後まで越えることは出来ませんでした。また違った部分で相手を感じる事が出来ました。帰国後もデポジションは日課となり、また体験するあらゆる出来事に意味を感じる事が出来るようになりました。この先どんな逆境でも進むことができます。共にいて、導いて下さる方がおられることを知っているからです。」

(市原悠史・19歳 ルーテル西宮教会)

●「正直な所、自分はこのキャンプにただアメリカに行くという中途半端な気持ちで参加していました。出発前、教会員の前でキャンプの目標を発表するとき、建前で、キャンプを通じて自分を大きくしたい、と言っていたが、そんなことは少しも思っていないでして。けれども、アメリカでの生活で、様々な出会いや奉仕活動などを通して、自分の小ささや弱さを身をもって痛感し、建前の目標がいつしか本当の目標になっていきました。」

(森田哲史・16歳 ルーテル都南教会)

●「僕が、このキャンプで得られたものは、とてもいい友達、そして、なによりも自分の神様への信仰が深まったことです。このキャンプに参加して、僕は堅信を受ける決心ができました。堅信を受けるきっかけとなったこのキャンプを支えてくれた人たちに心から感謝をしています。」

(近藤拓・13歳 ルーテル栄光教会)

●「私はこの旅で人の暖かさ、神様の愛を感じることができました。キャンプで心から祈っていたアメリカの同年代の子を見たとき、言葉は違っても神様への信仰心は同じことがわかりました。日本に戻ってきてから、友達にささいな事でもいから人のために無償で何かしよ〜と声をかけています。これからも、この気持ちを忘れずに生活していきたいです。」

(松岡あゆみ・15歳 ルーテル大岡山教会)

●「私はこの二週間で数えきれない程多くの笑顔を目にすることができた。これからは人の笑顔のために仕えていきたいと思う。主の御名によって。この二週間で感じた数々の体験は、何物にも代えることのできない心の支えである。もしも許されるのなら、もう一度参加したい。心からそう思うことのできる二週間であった。」

(谷口孝一・19歳 ルーテル本郷教会)

●「大学に入ってから3ヶ月間、多忙な日々とそれによる疲れから、私は毎日の生活の中で祈ることも聖書を聞くことも少なくなっていました。私の信仰は日に日に小さくなっていったと自覚しています。そんなからっぽな気持ちで毎週教会に通うことは大きな悩みでした。『こんな気持ちで家屋の修繕という大きな奉仕が出来るのか。』という思いの反面、『何か信仰を取り戻すきっかけをつかみたい。』という思いで、私はキャンプに参加することになりました。キャンプ3日目の夜のプログラムで、私たちは色々な方法で神様のことや、イエス様の十字架での痛みのこと、自分たちの罪などについておぼえ、祈る時間を持ちました。私が祈りを終え、会場を出ようとした時、同じワークサイトで働くクルーの姿を見つけました。屋間の陽気な彼とは違い、ただ静かに黙想する彼の姿はとても輝いて見えました。もうほとんどの参加者が会場から出ていったのに、彼は一人祈りつづけていました。私はその姿を見て自分も祈り忘れたことがあることに気が付き、彼の横に座って、それまでの不信仰な日々を神様に謝りました。そして、再び素直に神様の導きについていくことが出来るよう祈りました。その2日後の夜のプログラムで、私は“命の水”を飲みました。私にとってその水は、再び神様と契約し、神様の導くままについていくことを再確認する水となったのです。あとになって考えると、あの時祈る彼の姿を見なかったら、その“命の水”は私にとって何の意味も無い水になっていたと思います。今も目に残る彼の祈りの姿は、神様から私への大きな恵みとなりました。」

(助野勇太・19歳 ルーテル豊中教会)



屋根を修繕中の助野勇太君

佐藤牧師



永吉文音さん 横田裕哉君 藤岡沙弥さん 近藤拓君 太田幸彦君 関川美樹さん 森田哲史君



●「3日目の夜のプログラムの中での祈りの時間、僕はとくに祈りをしていたわけでもなく、ただ目をつむってここに来るまでに会ったひとたちの顔を思い浮かべながらAVON LAKEでのホームステイやこの3日間のワークキャンプのことを思い出していた。そして、ふと、何でこんなことをしているのだろうと思った。わざわざ遠く離れた日本から来て、3日前に初めて会った人のために一日中働いているのがとても不思議に思えた。僕は都南教会に来ていたマールからこのキャンプのことを聞き、前からアメリカに行きたいと思っていたのでとくに何も考えずに申し込み、JELAに任せてアメリカまで来た。そして、現地のスタッフの決めたクルーに分けられてあの家を修理することになった。僕は今までただそれに身を任せていただけだった。しばらくたって僕は目をあけて周りを見渡した。下を向いて祈りをしている人、部屋から出て行く人、ひとりで泣いている人、肩を組んで泣いている人、ニコニコしながら歩いていく人などいろんな人がいた。そしてステージに目を向けると、それぞれのユースグループが作ってきたいろんな形の魚がたくさん飾ってあった。僕はたくさんの魚を見たせいか、ふと、小

さいころかよく聞いていたペトロの話の思い浮かべた。ペトロが湖で網を洗っていると、イエスが近づいてきて『網を降ろして漁をなさい』と言われ、ペトロは魚など取れるはずはないと思いつつもイエスに言われるままに網を降ろした。すると、今までまったく取れなかったはずの魚が船の沈みそうなくらい網にかかった。それを見たペトロは思わずひれ伏した。イエスは『恐れることはない。今からあなたも私と一緒に人間をとる漁師になる』と言われ、ペトロはすべてを捨ててイエスに従った。僕は今まで何回もこの話を聞いていたけれど、よく意味がわからなかった。しかし、今この話を思い出してみると、ペトロが『網を降ろしなさい』というイエスの言葉に身を委ねたとき、ペトロはすでにイエスの愛にとらえられていたのだと思った。僕は、ここに来て、たくさんの人に出会ったこともすべて偶然だと思っていた。しかし実は、僕もペトロのようにすでにイエス様の愛にとらえられていたのだ。これはすべて神様の導きであって、神様はこんなにも自分を愛してくださっていたのだ。そう思った瞬間、涙がとまらなくなった。人間をとるとは、貧しい人々や弱い人々を愛し、仕え、希望をもたせることなのだ。この祈りの時間は僕にとって、とても大切なものになった。」

(太田幸彦・17歳 ルーテル都南教会)

世界が広がる会話とホームステイ

●「あれは4日目のフリータイムだったと思います。私たち日本人グループにいつも仲良くしてくれたニコールのお父さんと話をしていました。その方は高校のときに付き合っていた今の奥さんと19歳

で結婚し、ニコールが生まれ、牧師になり、養子が2人もいるというまだ33歳という若さにも関わらず、いろんな経験をしている方でした。その方が私たちに質問をしました。『日本にはキリスト教徒の人がどのくらいいるのか?』と。私たちは『ワンパーセント』と答えました。『ワンパーセント? そんなに少ないのに君たちはどうやってキリスト教を知ったのか?』ととても驚いた様子で聞かれました。私たちはそれぞれ、一人はキリスト教で育ったから、もう一人は両親とも牧師だったから、私もキリスト教で育ったから、などと答えました。するとお父さんは、『もし君たちがお母さんになったときに子供にキリスト教を伝えて、またその子供が子供にキリスト教を伝えて・・・そうしたら1パーセントが2パーセントに2パーセントが3パーセントにそして日本にもっとキリスト教が広まるよ。だから君たちがお母さんになったときに子供たちにキリスト教を広めるんだよ。』そのとき素直に私は、あっそうしよう、その方がいいな、と思えました。そのときは本当に素直に。今までは、キリスト教に対してそんなに熱心ではなかった私なのに、そのときは自然に、あっそうの方がいいかも、と思えたのです。今思うと自分でもびっくりする出来事でした。」

(菊地葉・16歳 ルーテル都南教会)

●「キャンプのうち1週間のホームステイで、私は毎日が驚きの連続でした。家の庭には夜になるとたくさんのホタルが飛び、手に乗るほどの小さなウサギも飛び回っていて、私には夢のような生活でした。まだ明るい夜の8時に、突然ブルーに連れて行かれてすごく寒かったことや、町のフェスティバルや動物園に行ったりと、ホストファミリーとの1週間は大切な思い出となりました。アメリカ人の生活の一番近くにいくことで、英語はもちろん、日常生活に触れて新しい世界が広がりました。」

(関川美樹・16歳 日本基督教団十貫坂教会)

引率者の目から見たキャンプ

●「金曜日の夜のデポジションで、『このキャンプを一言で表すと?』と全員に聞いた。『出会い』『宝箱』...思い思いの言葉が出てきた。私を感じたのは『成長』。手をつないで輪になり、一人ずつ祈った。私よりも子ども達の祈りの方が長かった。それぞれの胸の中には、きっとまだまだ言い尽く



浴衣姿の女性たち 左端 乙守望師、その隣り マール・ウッド姉



市原悠史君

大柴翔君

長島英子さん

松岡あゆみさん

菊地葉さん

谷口孝一君

山下七瀬さん

せない思いがあったのだろう。1週間でこんなにも成長するのかと驚いた。また、若くしてこんなに素晴らしい体験の機会を与えられた彼等を羨ましく思った。」

(乙守望・ルーテル田園調布教会)

●「キャンプに参加した日本の子どもたちは、ある意味でイエス様のうちに示された神さまの性質を表しています。イエス様はこの地上に、人の助けなしでは何もできない赤ん坊として来てくださいました。しかも、名もない町の、ごく普通の夫婦の子としてお生まれになったのです。しかし、この静かな始まりをとおして、人類全体に救いの道がひらかれました。同様に、神さまは16人の日本人の青年を選んでくださいました。どうしてこの16人だったのか、彼らに何ができるのか、誰にもわかりませんでした。しかし、この小さな始まり、2週間という短い旅は、聖霊の力をとおして、将来人々にいのちと救いをもたらすものとなるでしょう。教会で、そして日本の中で、彼らは神さまの恵みを分かち合う重要な道具になると私は信じています。」

(マーラ・ウッド・短期宣教師)

●「私はこのキャンプを通して気づかされたことがある。『ダイビング・ディープ』というフレーズによって奉仕する者へと招かれた私たちであるが、私たちが奉仕する者となると同時に多くの人々の奉仕によって生かされているという事実である。私たちがこのキャンプに参加するためにJELA、それぞれの教会、そして家族に押し出されてきた。このほかにも、ホストファミリーをはじめ、アメリカの教会の方々が私たちのために時間を費やして奉仕してくれたことを深く感じたのである。キャンプのスタッフはもちろん、何と多くの人々に支えられていることか。もちろん、私たちは日々の生活においても、同じように多くの人々の奉仕によって生かされているのであるが、私たちはそれを忘れていたことが実に多い。しかし、日々の生活からその視野を日本へ、アメリカへ、そして世界へと広げていくとき、私たちはいかに多くの人々の奉仕によって生かされているかを、そして何よりもキリストが仕えてくださっていることを知るようになるのであろう。」

(佐藤和宏・ルーテル千葉教会牧師)

2004年夏は米国コロラド州に派遣！ ただいま参加者募集中

以下の内容で十数名の参加者を募集します。参加希望者はJELAまでお問合せください。

グループ・ワークキャンプ2004参加者募集要項

- 派遣期間：7月27日(火)～8月10日(火)
- 内容：コロラド州でのホームステイと、同州 FountainのPikes Peak Workcampへの参加
- 問合せ先：日本福音ルーテル社団 (JELA)
住所：162-0842 新宿区市谷砂土原町1-1
電話：03-3260-8637/ファックス：03-3267-4636/email：jela@jela.or.jp
- 選考方法：2004年1月30日(金)までにJELAに申込用紙を提出した人の中から、書類選考により派遣者を決定します。申込用紙はJELAに請求してください。ホームページ (www.jela.or.jp) のボランティア派遣のページからもダウンロードできます。

*特記事項

- ①応募できるのは、2004年8月1日現在の年齢が14歳～20歳の方です。12歳から参加できるキャンプもありますが、コロラドの場合は14歳以上です。
- ②キャンプは超教派で運営されています。ルーテル教会の会員でなくても、またクリスチャンでなくても参加できます。
- ③牧師他数名の日本人スタッフが同行し、現地でのお世話と霊的サポートにあたります。
- ④夏のキャンプですが、準備の都合上、申込の受付期限を1月30日に設定してあります。
- ⑤www.groupworkcamps.comからグループ・ワークキャンプの詳細な情報(英文)が入手できます。



引率者も募集中！

来年の、または今後のワークキャンプに同行し、子どもたちの世話をしてくださる方を募集しています。条件は以下のとおりですので、希望者あるいはふさわしい方をご存知の方は、JELA事務局までご連絡ください。ご本人と面談のうえ、採否を決定いたします。

●採用条件

- ・成人であること。
- ・クリスチャンとして確固たる信仰を持っていること。
- ・英語・日本語ともにコミュニケーション力が高いこと。現地では、日本語⇄英語の通訳の機会が頻繁にあります。
- ・子どもが好きであり、体力に自信があること。キャンプの一週間は現地の学校が宿泊地となり、多数の子どもたちと一緒に寝袋やエアマットで教室に寝る生活です。

●費用負担

往復航空運賃、キャンプ参加費、現地での食費等、必要経費はすべてJELAが負担します。日当その他の報酬はありません。

ワークキャンプ・プログラムの拡大



左から、パーソン理事、グリテベック事務局長、グループ責任者 ジョー・フェイ氏

グリテベック事務局長とパーソン理事は10月に米国コロラド州ラブランドにあるグループ・ワークキャンプ本部を訪問しました。そして、日本の青少年や成人がボランティア活動に関わる新たな道について現地担当者と協議しました。今後も米国のキャンプに日本から青年を派遣する一方で、JELAは日本国内とインドでワークキャンプを実施する可能性を検討しています。米国同様に日本で実施する場合も中高生を対象としたキャンプを考えていますが、インドの場合は、大学生以上の年齢の方が参加するキャンプを念頭に準備を進めています。来年に入り計画が具体化した段階で、この新しいプログラムの概要をご紹介します。

キャロル・サック姉の

Music Thanatology 音楽による看取りのケア

米国での2年間の研修を終えたキャロル・サック姉が日本に帰ってきました。姉が修めたのは Music Thanatology(音楽による看取りのケア*)で、その実践は日本のみならずアジアでも珍しいものです。姉がこの働きに関わるようになったきっかけ、働きそのものの歴史的背景、日本での実践内容等について本人から紹介していただきます。JELAは「音楽による看取りのケア」の働き人を養成するため、2004年に恵比寿に竣工予定の自社ビルにて、一般向け講座の開設を計画中です。

●死にゆく人のための音楽 キャロル・サック

6年前、神さまは私にいっふう変わった方法で語りかけられました。当時、私はアイルランドの民族音楽用ハーブのレッスンを受けていて、その楽器の演奏を楽しんでいました。同じ時期に、娘が神経病的な問題があると診断を受けました。それを知ったとき大変ショックでしたが、友人たちが祈ってくれたことは、大きな励ましと力になりました。そしてこの経験をとおして、いままで以上に祈りについて、とくに苦しみの中にある人々への祈りについて考えることとなりました。

以来、病に臥している人を病院や家庭に訪問し、その苦しみのためにとりなしの祈りをしてきました。5月のさわやかな東京の夜、私は小さなハーブを手に電車に乗っていました。そして、突然ひらめいたのです。この持ち運びに便利なハーブを用いて、ベッドのそばでお祈りをしてあげるのはどうだろうと。私は旧約聖書のダビデの話を思い



出しました。彼は詩篇をつくり、自分の豎琴を奏でながら詩篇を歌うことで、王サウルの心の苦悩をやわらげようと努めました。即座に私は理解しました。神さまが私をお造りになったのは、このためだったのだと。

喜ぶべきことに、その3ヵ月後に、モンタナ州ミゾーラの聖パトリック病院でユニークな音楽の講義が開かれていることを耳にしました。そこでは、死に瀕している人々のベッド際でハーブを弾きながら歌を歌う音楽療法士を養成していました。この領域は「音楽による看取りのケア」と呼ばれます。プログラムの存在を知り嬉しかったのですが、最初に思ったのは自分がそれに参加するのは無理だろうということでした。というのは、私は夫そして子どもたちと一緒に東京で暮らしていたからです。しかし、神さまは扉を開けてくださいました。日本福音ルーテル教会、米国福音ルーテル教会、そしてその海外宣教部門(DGM)の寛大な計らいによって、モンタナ州で2年間の集中プログラムを受ける道が開かれたのです。家族みんなでモンタナに移り住み、この神さまからの召命に従うことができたのは、本当に嬉しいことでした。

「音楽による看取りのケア」は歴史的には修道院の医術にその基礎をおいています。11世紀のフランスのクーニー地方のベネディクト会修道士た

ちは、精神的理想としての美に絶大な関心を抱いていました。彼らが美を追求したのは、それを神さまの恵みを体験できる手段の一つと考えたからです。そのため、美の表現、とくに音楽におけるそれに大きな関心を寄せました。修道士たちはまた、弱者や病気の者を心から尊敬し、死に瀕している人をキリストご自身であるかのように大切に扱いました。彼らは死にゆく人は美に囲まれている必要があると考えていましたので、死に直面している人、あるいはすでに昇天しキリストのもとにいったしまった人のためにグレゴリオ聖歌の様式で聖書のことばを歌い上げました。彼らはこれを、臨終の癒しと呼びました。

死につつある人のベッドの傍らで演奏される歌とハーブ演奏の美しさが病室を聖所に変えると私たちは信じています。私たちが提供する音楽はいつも生演奏です。患者さんの一刻一刻の生理的变化にあわせて奏する必要があるからです。演奏者ではなく患者さんが中心となり働きを導きます。そしてそのことが、死に近づきつつある人に、たとえその人が意識のない状態になっていたとしても、大いなる尊敬を与えます。45分から1時間の演奏のあいだに、患者さんが深い眠りに入ったあと元気を取りもどしたり、痛み止めの薬が必要でなくなるのがしばしば起こります。演奏を聞いているとき、患者さんの心拍や呼吸は通常ゆっくりと落ち着いたものになります。愛する肉親が音楽の美に囲まれているのを目にすることは、患者さんの家族にも大きな癒しと慰めを与えているようです。

演奏する時、私はいつもそれを祈りとして行います。ふつうの演奏からイメージされるパフォーマンスやコンサートとしてではなく、私がするのは音楽という形をかりた祈りです。それは、ことばの真の意味における薬です。いままでやったどんなことよりも私はこの働きが好きです。というのは、音楽は深く人の心に届き、言葉・文化・宗教の壁を超えるからです。時にそれは奇跡的さえあります。四世紀の聖人アウグスティヌスは、歌う人は二度祈っている、と言いました。いま私はその意味がわかります。

私はこの働きを「希望の家」(Hope House)で実践しています。そこは、ホームレスの人がおおぜい暮らす東京・山谷に一年前にできたホスピスです。この家に住まう人々が永遠の休息にむけた準備に入るとき、イエス・キリストの愛とともに、これら兄弟姉妹のために奉仕できることは大きな特権であり名誉です。この人たちがクリスチャンであるか否かにかかわらず、キリストの愛が彼ら一人ひとりに触れてくださっていること、言葉ではうまく表現できませんが、私はそれを強く感じます。そして、そのことを神さまに感謝しています。



患者さんのベッドのわきでハーブを奏でるキャロル姉

*注: Music Thanatologyは「音楽死生学」と訳されることもありますが、ここではその実践的な意味を表現するために、「音楽による看取りのケア」という訳を用います。

アジア学院に留学中の シホンビン牧師からのメッセージ



シホンビン氏（アジア学院にて）

JELAの奨学金を受けて、アジア学院（栃木県）で研修中のティゴ・シホンビン牧師（1966年生まれ、インドネシア出身）は、1992年以来インドネシアの教会で牧会され、貧しい農民や漁民の生活改善と社会福祉事業に尽くしてこられました。最近以下のメッセージがJELAあてに届きましたのでご紹介します。日本での研修内容がインドネシアで活かされるようにお祈りください。

国へ帰ったら、「JELA農場」を始めます！

私は農民とともに働くこと、彼らに仕えることが好きです。私の夢は、農民に助けの手を差し伸べることで、彼らの生活がマタイによる福音書25章35節～40節にあるようにより良いものとなることです。牧師である私には、村の貧しい人々を助ける義務があります。JELAの奨学金を得てアジア学院で研修できるこの機会を、たいへん嬉しく思っています。たくさん新しいことを学びました。この知識をインドネシアの貧しい人々を助けるために役立てたいと思います。素晴らしい機会を提供してくださったJELAの皆様へ心から感謝します。

アジア学院では家畜、とりわけ豚の飼育について学んでいます。実習もありました。そこでは日本で用いられている栄養価の高い餌ではなく、インドネシアでも手に入る材料で作った餌を試しました。有益な知識が得られ満足しています。今回の研修で家畜のことを学ぼうと思ったのは、インドネシアの私が暮らす地域では豚がとても貴重な動物だからです。結婚式や教会の催しなど、パーティやお祭りのときはいつも豚の肉を食べます。国へ帰ったら豚の育て方を貧しい人々に教え、それを彼らの収入源にしてもらおうと思っています。このアイデアを実現するため、私を派遣してくれた組織に働きかけて、豚の飼育その他さまざまな農作業ができる農場を作りたいと思っています。その農場で貧しい農民に研修を受

けてもらうようにし、それを修めた人に子豚を提供して自分で育てさせるのです。この計画に派遣元の団体が協力してくれないようならば、小さなものになるかもしれませんが自分で農場を作り、考えていることを実践するつもりです。どんな形であれ、日本で学んだことを有効に利用したいと思います。ちなみに、農場の名前は「JELA農場」にする予定です。アジア学院での私の研修を支えてくださったJELAのことをいつまでも忘れないためです。

奨学金を提供してくださったJELAの皆さまに、もう一度心よりお礼を申し上げます。

神さまがいまこのとき、そしていつまでも私たちと共にいてくださいますように。

ティゴ・シホンビン

アジア子ども支援「神様の子どもたち」



インド支援地域ジャムケッドの責任者 アロレ博士からのメッセージ

アロレ博士は2002年10月に、LWR代表のキャスリン・ウォルフォード氏らとともに来日され、ご自分のインドでの働きに関する講演をなさいました。以下は博士からの「神様の子どもたち」支援者の皆さまへのメッセージです。

親愛なる日本の皆様へ

インドからこうして皆様にご挨拶を申し上げますことを光榮に存じます。

私が働いておりますC R H P (Comprehensive Rural Health Project: 総合的地域健康プロジェクト)は、インド南西部のマハラシュトラ州の中心に位置するジャムケッドという町にあります。ここは一年を通じてほとんど雨の降らない、経済的に極めて貧しい地域です。私たちは300を超える村の子どもや女性、そして「ロー・カースト」と呼ばれる、社会的に見捨てられた人々を中心に、総合的な健康増進活動をここで展開してきました。30年を超える活動の成果として、幼児死亡率が大幅に低下したこと、栄養失調や急性または慢性的な感染症がほぼ駆逐されたこと、地域に住む女性と社会的弱者の生活が大きく改善されたこと、などがあ

られます。

私たちは児童、とくに女子の生活改善に力を注いでいます。インドでは昔から女性が大事にされてきませんでした。栄養価の高い食べ物を与えられず、学校にも行かせてもらえない、幼児期においても成長してから暴力の犠牲になることが多いのです。私たちはこのような現状を打開するために、子どもの生活基盤である家族とそれらの人々が生活する地域を軸として、住民の健康や社会での扱われ方等について総合的な改善を目指す活動をしています。

JELAの「神様の子どもたち」をとおして、皆様がジャムケッドの子どもたちに関心を寄せ、暖かい支援の手を差し伸べてくださることに心から感謝いたします。一人ひとりが神様の作品である、この愛すべき子どもたちに輝く未来をひらくために、私どもの働きをどうか支えてくださいますようお願い申し上げます。

感謝をこめて

C R H P 代表・医学博士 Raj Arole

インドの病院に乳児保育器を寄贈

インド・ジャムケッドの病院のために乳児保育器を購入し、9月に送り届けました。購入資金には、昨年市ヶ谷で開催されたLWR代表ウォルフォード氏およびジャムケッドのアロレ博士の歓迎パーティで集まった会費をあてました。

病院ではこれまで、木の箱と電灯を保育器がわりに用いてきましたが、最新機器によって、新生児に対して清潔で健康的なケアができるようになったとのことです。皆さまのご協力に感謝します。ジャムケッドの病院のために次に購入を予定しているのは、重病患者のための酸素吸入器です。この話が具体化しましたら、写真とともに皆さまにお伝えします。



古い保育器とアロレ博士の娘であり医学者であるショバさん



寄贈した新しい乳児保育器と新生児

JELAはグループ・ワークキャンプの他に以下のボランティア派遣事業を実施しています。関心をお持ちの方はJELA事務局までお問い合わせください。

●米国ルーサーリッジ・バイブルキャンプ

派遣期間：5月下旬からの10週間(短期参加も可)

派遣人数：数名

内容：ノースカロライナ州で実施されているルーテル教会の米国人青少年向けキャンプ(ルーサーリッジ・バイブルキャンプ)に、スタッフとして派遣します。米国の小学生から高校生が夏の10週間集うキャンプの世話人として、スポーツその他の戸外活動を楽しく有意義に導ける人材が求められています。部分参加も可能ですが、プログラムが目的とするリーダーシップ養成訓練を存分に体験するためには、全期間の参加が望まれます。

応募資格：①20歳以上で短大卒業以上の学歴を有すること、②しっかりしたキリスト信仰を持っていること、③米国人と通常のコミュニケーションができる英語力を有すること。

必要経費：航空運賃15万円。滞在費用はルーサーリッジから支給される。

応募受付：随時。ただし、その年の派遣を希望する場合は、3月末までに申し込むこと。

●ブラジル

派遣期間：不定期。現地は最低6ヶ月を希望。

派遣人数：数名

内容：JELAが支援しているサンパウロ州の子どものための教育福祉施設に派遣します。ここでは、読み書きの基礎教育、食事サービス、健康管理、技能訓練、情操教育等のプログラムによって、子どもたちの生きる権利を守り、ストリート・チルドレン化を防ぐ働きが行われています。

応募資格：①年齢制限なし、②日常会話程度のブラジル・ポルトガル語の能力を有すること、

③ブラジルの子どもたちと分かち合う具体的なプログラムのアイデアを有すること。

必要経費：航空運賃20万円、滞在費用1500USドル(6ヶ月)。

応募受付：随時

●インド

派遣期間：2ヶ月間(短期参加も可)

派遣人数：数名

内容：LWRおよびLWFと連携の上、インド西部(ジャムケッド)の開発地域・病院または東部のカルカッタ都市部(マザー・テレサの孤児施設での奉仕等を含む)に派遣します。クリスチャンとしての奉仕をとおして、ルーテル関連国際組織との連携意識を高めていただきます。

応募資格：①年齢制限なし、②基礎的英語力を有すること、③病院での奉仕を希望する場合は、医療・看護の基礎知識を有すること。

必要経費：航空運賃15万円。滞在費用は一日2000円程度。

応募受付：随時

●バングラデシュ

派遣期間：7月中旬から9月中旬(短期参加も可)

派遣人数：数名

内容：LWFと連携の上、バングラデシュ北部の地域開発組織RDRS(Rangpur Dinajpur Rural Service)に派遣し、奉仕と学習の機会を提供します。RDRSには毎年40名以上のボランティアが世界各地から集まり、貧困撲滅に力を注いでいるルーテル教会の働きや、開発援助のアプローチを体験学習しています。大学生レベルを対象とした幾分アカデミックなプログラムです。

応募資格：①大学生以上の年齢であること、②ある程度の英語力を有すること。

必要経費：航空運賃約15万円。滞在費用一日2000円程度。

応募受付：随時

JELA自社ビル起工式が行われました

JELAは東京・恵比寿に自社ビルの建築を計画しています。10月17日にその起工式が、40名の参列者が見守るなか、日本福音ルーテル教会・松岡事務局長の司式



ビル模型 (CG合成)

により行われました。挨拶の中で松岡事務局長は、日本福音ルーテル教会がその働きを進めてゆくうえでJELAは重要なパートナーであると述べ、教会が直接的な伝道を担う一方で、JELAは教会がなし

得ない分野において、助けを必要としている人々への支援を推し進め、互いに良い関係を継続してゆきたいと語りました。

JELAの自社ビルは10階建てです。1階は多目的ホールで、チャリティー・コンサート、展示会等の各種イベント、講座用の教室、礼拝施設等として利用できます。ルーテル教会関係者のみならず、社会福祉関連のさまざまな団体にこのホールを開放します。2階はJELAの事務所、小会議室、ビデオやCD等を制作するためのプロダクションルームです。3階から10階までは住宅として一般に貸し出しますが、一部の宣教師がここに住まうことも考えています。ビルは2004年11月にできあがる予定で、完成のあかつきには竣工式その他の催しを計画しています。

赤間峰子/浅見正一・君江/尼島治/荒井梯次郎・和子/阿波田絹子/安藤淑子/石田浩子/石嶺昇/石嶺万起子/伊藤初江/井上芳江/岩本保子/上村公夫/江澤妙子/柏原利/兼岩恵美子/蒲田教会婦人会/来嶋紀美子/木村数枝/京谷信代/釧路教会/工藤純一/倉重みどり/古財克成/斉藤正恵/酒井恵美子/坂下勝美・友子/坂根信義/清水誉至子/霜尾閑子/白髭市十郎/菅広敬・芳子/杉浦りえ/須々木敦弘/鈴木千介/鈴木やす/関口佳子/高橋進・いずみ/高橋佳子/高橋竜太/竹下公生・香代子/田中美紗子/玉名教会/堤重敏・和子/戸田和代/鳥居和代/長尾博吉・法子/中川千恵/中田直美/中村孝治・敬子/中村雍子/名古屋めぐみ教会/西一郎/西恵三・千恵/西川順子/西立野園子/野口泰介・順子/野原弘子/芳賀明子/芳賀直哉・美江/早瀬康平/ハルポーセン美智代/日野原万記/兵藤真里子/平林洋子/福田陽子/藤井義/藤橋日出子/船城道雄・俊子/松隈貞雄/松田美智子/南節子/南谷昌秀・なほみ/武藤康子/名東教会/森田雅子/山崎恵美子/山崎隆義・嘉子/湯河原教会婦人会/雪ヶ谷教会/渡辺聡/匿名1名

Axton Kevin/Baker Jaclyn/Buckingham Wanda/Dignan Candae/Ericson Weibert/Evangelical Lutheran Church in America/Family of God Lutheran Church/Grace Evangelical Lutheran Church/Gretebeck Isabel/Meier Romaine/Peace Lutheran Church/Person David/Pierce Huldah/Rasmussen Peter/Rice Bernece/Showers Betty/Smith Delyla/Sommerfeldt Judith/Weis Debra 以上

(2003年7月1日~10月31日、敬称略)

編集後記

今回は海外ボランティア派遣事業を特集しました。次号では、今回掲載できなかった難民支援やブラジル子ども支援等の最新ニュースをお届けしたいと思います。なお、JELAの活動についてさらに詳しくお知りになりたい場合は、喜んでお集まりの席に説明にあがりますので、JELA事務局までお問合せください。クリスマスの祝福を祈りつつ。(M)